日本語の連体修飾節におけるル形、タ形について

劉　甜甜

DOI: 10.18999/stul.37.57

1．はじめに

日本語のテンス・アスペクトの体系は複雑で、日本語学習者にとって難しい問題の一つである。特に複文において、従属節のテンスを判断する時、主節と従属節の相対的テンスの関係を考慮する必要があるため、日本語学習者にとっては理解が難しい。

例(1)は主節時を基準とす例で、従属節のタ形は「早く来る」という事態が「椅子を運ぶ」より前に生じることを表し、ル形は後に生じることを表す。

(1)a.　明日早く来た人は椅子を運んでください。(来る→運ぶ)

b.　明日早く来る人は椅子を運んでください。(運ぶ→来る)

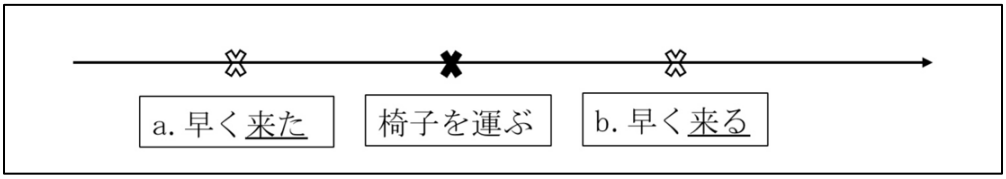

図1．例（1a）と例（1b）を表す時間軸

一方、例(2)は発話時を基準とする例で、タ形の「自殺した」は「自殺する」という事態は発話時より前にあることを表す。

(2) 越前海岸で自殺した女性はそこへ行くのにタクシーを使った。(三原 1991:65)

図 2. 例（2）を表す時間軸

このように、従属節のテンスは主節のテンスと比べ複雑で、判断基準も場合によって違うため、日本語学習者にとって難しい文法項目である。本研究は、被修飾名詞が実質的な内容をもつ実質的な名詞である場合の連体修飾節（以下は連体節と呼ぶ）の時制について研究し、日本語学習者が複文を正確に理解し、使えるようにすることを目的としている。

2. 先行研究

日本語の連体節におけるル形、タ形に関する先行研究は寺村（1984）、町田（1989）、三原（1991, 1992）、丹羽（1997）、岩崎（1998）、伊藤（2011）などがある。まず、「時制」を表す場合、寺村（1984）と町田（1989）では、連体節時制は主に主節時基準が原則であるように考えられていたが、その後の研究（三原 1991, 1992）では「主節時視点」と「発話時視点」という「視点の原理」があることを主張している。さらに、その後の研究（丹羽 1997、岩崎 1998、伊藤 2011）では主節時基準の他に、発話時基準も存在するという考えが主流になっている。次に、連体節の述語（ル形・タ形）がテンス以外を表す場合の先行研究には大島（2008）、丹羽（2013）などがある。本節では先行研究の主な問題点を指摘し、本研究の立場について述べ、研究課題と研究方法を提示する。

先行研究の多くはすでにできあがった文について、連体節の述語のル形／タ形が「主節時視点」をとっているか「発話時視点」をとっているかという理解の面について議論している。例えば、例（3）のタ形は連体節の「来る」は主節の「椅子を運ぶ」より前に起きることを表し、例（4）のタ形は連体節の「自殺する」は発話時より前に起きることを表す。しかし、話し手（書き手）がどのような場合に「主節時視点」をとり、どのような場合に「発話時視点」をとるかという産出の面では議論が不十分である。

（3） 明日早く<u>来た</u>人は椅子を<u>運んでください</u>。（主節時視点）

（4） 越前海岸で<u>自殺した</u>女性はそこへ行くのにタクシーを<u>使った</u>。（発話時視点）

そこで本研究では、どのような場合に「発話時視点」をとり、どのような場合に「主節時視点」をとるか、どのような場合にどちらの視点をとっても適切であるのかを明らかにする。

3. 視点が時制形式に影響を与える場合

本節では話し手(書き手)がどのような場合に「発話時視点」をとり、どのような場合に「主節時視点」をとるかがわかりにくいものを整理する。まず、連体節と主節の時制形式(ル形・タ形)の組み合わせによって、次の①～④の4つの構文パターンに分ける。次に、それぞれの構文において、連体節の事態、主節の事態、発話時(ST)の3つの時間関係を調べ、各構文に属する事態タイプと例文を示した。

① 連体節:ル形、主節:ル形 (ST＝発話時)

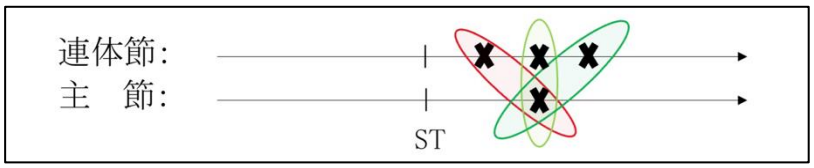

図 3. ル形、ル形の場合の事態タイプ

(5) 次に選ばれる市長に市の再建を任せます。(ST→連体節→主節)
(6) 来月北海道に行く観光団は船で行きます。(ST→連体節＝主節)
(7) 試験を申し込む人に事前に知らせてください。(ST→主節→連体節)

② 連体節:ル形、主節:タ形

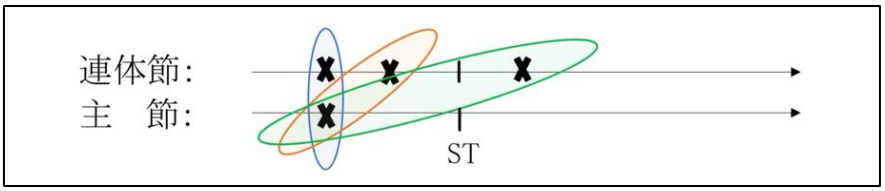

図 4. ル形、タ形の場合の事態タイプ

(8) 北海道へ行く観光団は船で行きました。(連体節＝主節→ST)
(9) テントを借りる人は、使用料を払いました。(主節→連体節→ST)

（10） 明日来る人に電話しました。（主節→ST→連体節）

③ 連体節：タ形、主節：ル形

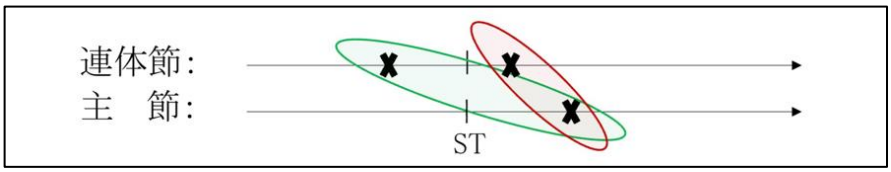

図 5. タ形、ル形の場合の事態タイプ

（11） 昨日買った本を明日返品する。（連体節→ST→主節）

（12） 来年度優秀な修士論文を提出した人だけ、博士課程に進級させる。

（ST→連体節→主節）

④ 連体節：タ形、主節：タ形

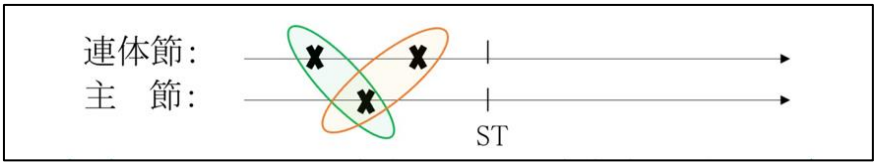

図 6. タ形、タ形の場合の事態タイプ

（13） 見物を終えた患者たちは、病室内に引き揚げた。（連体節→主節→ST）

（14） 太郎はレースで勝った馬をみごと予想した。（主節→連体節→ST）

以上の①～④の図（丸囲みは必要部分のみ残した）を並べると、図 7 のようになる。

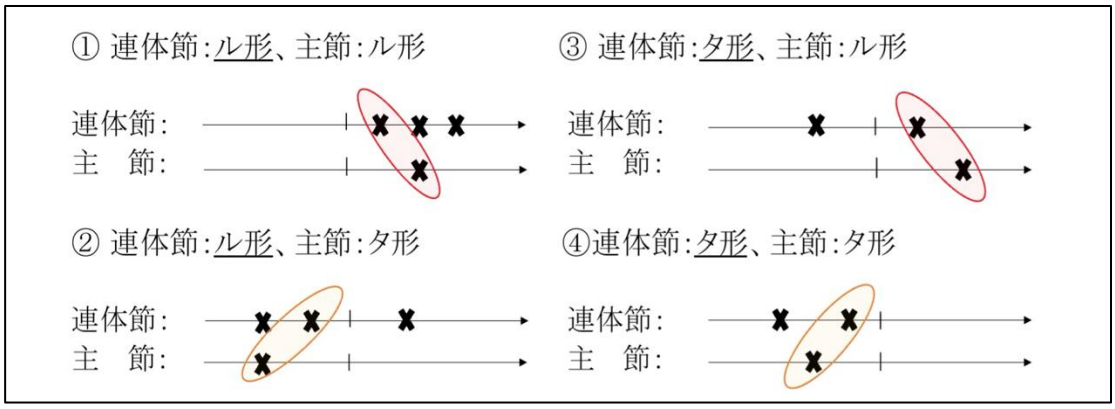

図 7. 視点の選択が問題となる事態タイプ

このうち、①と③の丸で囲んだ部分は連体節のル形・タ形の違いはあるものの同じ「A. ST→連体節→主節」という時間関係になっており、②と④の丸で囲んだ部分もル形・タ形の違いはあるものの同じ「B. 主節→連体節→ST」という時間関係になっている。①と③、②と④は同じ時間関係であるにも関わらず、連体節のル形・タ形が異なるため、日本語学習者にはその違いが理解しにくいのである。

ここで、例えば事態 A について、どのような場合に「発話時視点」をとり(連体節でル形をとり)、どのような場合に「主節時視点」をとる(連体節でタ形をとる)のかが問題となる。

「A. ST→連体節→主節」

(5) 次に選ばれる市長に市の再建を任せます。(ST→連体節→主節)
＝①(発話時視点)

(5)' 次に選ばれた市長に市の再建を任せます。(ST→連体節→主節)
＝③(主節時視点)

このほか、例(15)のように連体節の述語が状態性述語で、連体節と主節の事態が点として時間軸に位置付けにくいもう一つの視点の選択が問題となる事態タイプ(「C. 連体節＝主節→ST」)がある。事態Cは発話時以前の連体節と主節が同時であることを表す事態で、「発話時視点」でタ形にもなり、「主節時視点」でル形にもなる。

(15) 太郎は昔山の上に{ある／あった}学校に通っていた。

以下、4節では連体節の述語がタ形の場合、5節では連体節の述語がル形の場合について見ていく。

4. 連体節の述語がタ形の場合

連体節の述語がタ形の場合、視点の選択が問題となる事態タイプである「A. ST→連体節→主節」、「B. 主節→連体節→ST」、「C. 連体節＝主節→ST」のほかに、視点の選択が問題とならない事態タイプである「D. 連体節→ST→主節」、「E. 連体節→主節→ST」の二つが該当ある。また、この場合も時間軸に位置付けにくい視点の選択が問題とならない事

態タイプである「F．連体節→主節＝ST」がある。

4.1 視点の選択が問題とならない事態タイプ

D、E、Fの三つの事態タイプはいずれも連体節の事態が「発話時」や「主節」より前に起きる点で共通している。この場合、「発話時視点」であろうと「主節時視点」であろうと、連体節は最初に起きる事態であるためタ形となる。

「D. 連体節→ST→主節」

（16） では、ロールプレイに基づいて作成した皆さんの報告書と提案書を拝見します。（Yahoo!知恵袋）

（17） だが、香保を失った自分は、なにに代償を求めたらよいのか。（雪煙）

例えば、例(16)の場合、もし「発話時視点」で考えれば、「報告書と提案書を作成する」ことが発話時においてすでに発生したことであるため、タ形の「作成した」をとることになる。一方、もし「主節時視点」」で考えれば、「作成する」ことが主節の「拝見する」ことの前にあるため、タ形の「作成した」をとることになる。どちらの視点をとるにせよ同じタ形を使うことになる。例(17)も同様である。

「E. 連体節→主節→ST」

（18） 松永香保に贈った愛の記念品が、彼女を殺害した犯人を捕えた。（雪煙）

（19） 会社のトイレでコートを脱いでかけたままそのまま置き忘れてしまい、見つけた方が警備さんに届けてくださいました！（Yahoo!知恵袋）

例えば、例(18)の場合、もし「発話時視点」で考えれば、「彼女を殺す」ことが発話時においてすでに発生したことであるため、タ形の「殺した」をとることになる。一方、もし「主節時視点」で考えれば、「彼女を殺す」ことが主節の「犯人を捕まえる」ことの前にあるため、タ形の「殺した」をとることになる。どちらの視点をとるにせよ同じタ形をとることになる。

以下の例(20)と例(21)の場合、主名詞が文字、図などの情報が記載される場所を表し、「連体節（動作主の行為）→主節（話し手の発見）→ST」表す。

(20) この問題では、米メディアが先週末に、国防情報局(DIA)が作成した昨年九月の**報告書**に、「大量破壊兵器隠匿については、十分な情報はない」と記載されていたと報道。(産経新聞)

(21) 設計士が作った**間取り図**には部屋が五つあった。(朝日新聞)

「F. 連体節→主節＝ST」

(22) 回答くれた方、ありがとう。(Yahoo!知恵袋)

(23) ハリスと約束した条約調印の日は、とうに過ぎている。(お墓曼陀羅)

(24) 鉄の時代にきた人間は昇天することができない。(梅原猛著作集)

F は「主節＝発話時」で、連体節の事態は発話時(主節時)より前に起きることを表す場合である。例(22)の主節は発話時における感謝を表し、例(23)の主節は発話時の「約束の時間が過ぎている」という状態を表し、主節時と発話時が同時であると捉えられる。例(24)の主節も発話時における判断を表すため、発話時と同時のことであると捉えられる。これらの文は主節時と発話時が同時であるため、「主節時視点」と「発話時視点」の区別が不明確になる。

4.2 視点の選択が問題となる事態タイプ

次に、「発話時視点」と「主節時視点」の区別が問題になる事態タイプ A、B、C について分析する。

「A. ST→連体節→主節」

例(25)は「ST→連体節→主節」という時間的前後関係を表す例である。この場合、連体節の時制は「発話時視点」でル形にもなるし、「主節時視点」でタ形にもなる。

(25)a. 来週出席する人は、再来週休んでもいいです。(発話時視点)

b. 来週出席した人は、再来週休んでもいいです。(主節時視点)

例(25a)は「発話時視点」の例である。この場合、連体節の「出席する」は図 8 に示すように発話時より後に起きる事態であるためル形になっている。

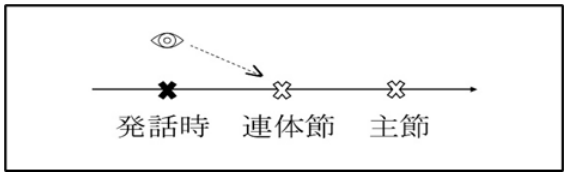

図 8.「発話時視点」をとる場合（25a）

一方、例(25b)は「主節時視点」の例である。この場合、連体節の「出席した」は図 9 に示すように主節時より前に起きる事態であるためタ形になっている。

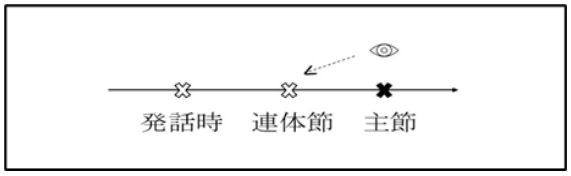

図 9.「主節時視点」をとる場合（25b）

先の例(25)では「連体節(来週:前)→主節(再来週:後)」という時間関係であったが、次の例(26)は逆に「主節(今週:前)→連体節(来週:後)」という時間関係になっている。この場合、「発話時視点」の(26a)は成立するが、「主節時視点」の(26b)は成立しない。

(26)a.　来週出席する人は、今週休んでもいいです。(発話時視点)
　　b. *来週出席した人は、今週休んでもいいです。(主節時視点)

このことから、両者には以下のような意味の違いがあると考えられる。

① 「発話時視点」をとる場合:
連体節と主節の前後関係が定まっておらず、どちらも発話時以降のことであることを表す。

② 「主節時視点」をとる場合:
連体節と主節の前後関係が定まっており、連体節の事態が成立した場合に、主節の事態が成立することを表す。

そのため、「発話時視点」をとる場合は、述語部分だけ見ても連体節と主節の前後関係が定まらず、時間副詞などによって前後関係が判断されることになる。

次に「主節時視点」になる文の特徴を見る。まず、表現したい事態が次のような特徴を持

つ場合は、「主節時視点」になりやすい。

a. 「連体節→主節」という事態の前後関係がある。

b. 連体節が確定した時点にある事態ではなく、ある場合での一般的なことである。

例えば、例(27)は連体節の事態「授業を払う」が先にあり、その後に主節の事態「授業料が戻って来る」が行われるという時間関係がある。ただし、発話時において連体節の事態が成立しているかどうかは文脈がないと不明で、どちらの可能性もある。すなわち、例(28)の場合、発話時点ですでに授業料を払っている可能性もあれば、まだ払っていない可能性もある。次の例(31)も同様である。

(27) 大学を辞める場合、払った授業料は戻って来ますか？(Yahoo!知恵袋)

(28) レンタルした音楽 CD を MD にダビングするのは違法になるのでしょうか？(Yahoo!知恵袋)

例(29)と例(30)の連体節は「今後」「十年後」という未来を表す時間副詞があるため、上の例(27)と例(28)と違い、発話時以後の事態であることが分かる。しかし、発話時以後のどの時点で連体節の事態が発生するかは不確定で、連体節の事態が発生したら主節の事態も発生する(つまり、主節の事態が生じた時点で連体節の事態が完了している)ことが重要である。このような用例は今回調査したコーパス(BCCWJ)からは2例しか出現しなかった。

(29) また、今後レンタルが終った家電が返ってくることになりますが、(後略)(循環型社会白書)

(30) 十年後に防虫剤の匂いの染みついた服を着せられる子供の身になってくださいよ、旦那さん！(Yahoo!知恵袋)

次に、例(31)と例(32)のようにあることをする手順、方法を説明する場合を見る。これらの表現は、文全体が特定の時間を表さない非アクチュアルな事態を表している。この場合、「主節時視点」をとり、「連体節→主節」という時間的前後関係は表すが、それが発話時点の前のことか後のことかは定まっておらず、超時的な事態を表している。

（31）ホールトマトを缶汁ごと加えて木べらでつぶし、そのまま煮つめる。取り出しておいた牛肉を食べやすい大きさに切る。（オレンジページ）

（32）オープン・トリートメント法は、ホクロをパンチでくり抜いて、くり抜いた部分を上皮化させる方法です。（医師による切らない「赤アザ・赤ら顔(浮きでた青い血管)」の最新治療）

「B. 主節→連体節→ST」

例（33）は「主節→連体節→ST」という時間的前後関係を表す例である。この場合、連体節の時制は「発話時視点」でタ形にもなるし、「主節時視点」でル形にもなる。

（33）a. 容疑者は、翌日強制捜査を行った警察官と、捜査の前日に会った（らしい）。

b. 容疑者は、翌日強制捜査を行う警察官と、捜査の前日に会った。

（岩崎 1998：50）

例（33a）は「発話時視点」の例である。この場合、連体節の「強制捜査を行う」は図 10 に示すように発話時より前に起きる事態であるためタ形になっている。

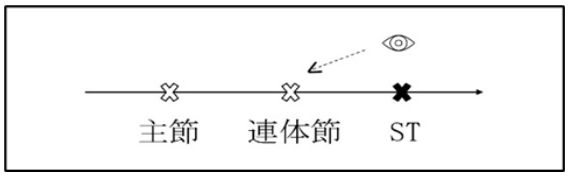

図 10. 「発話時視点」をとる場合（33a）

一方、例（33b）は「主節時視点」の例である。この場合、連体節の「強制捜査を行う」は図 11 に示すように主節時より後に起きる事態であるためル形になっている。

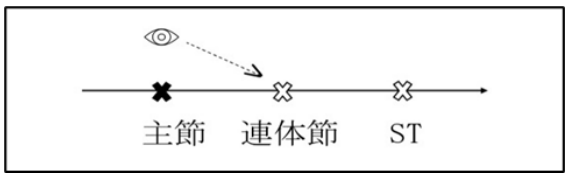

図 11. 「主節時視点」をとる場合（33b）

先の例（33）は「主節（会う）→連体節（強制捜査を行う）→ST」という時間的前後関係であったが、次の例（34）は「主節（会う）→ST→連体節（強制捜査を行う）」という時間的前後関係

である。この場合、「主節時視点」の(34b)は成立するが、「発話時視点」の(34a)は成立しない。このことから、「主節時視点」をとる場合、連体節の事態が主節時より後に起きることであれば、発話時の前でも後でも可能であることが分かる。

(34)a. *容疑者は、明日強制捜査を行った警察官と、今日会った。(発話時視点)
b. 容疑者は、明日強制捜査を行う警察官と、今日会った。(主節時視点)

次に例(35)～(37)のように時間関係が「主節→連体節→ST」の順になっている文の特徴を見ていく。

(35) 因みに紹介した写真はカシオのエクシリムで撮ったものです。(Yahoo!知恵袋)
(36) もともとおれがちょっと手を触れた麻薬は、組長が関わっていたコネクションの女が持ち込んだものだ。(雪煙)
(37) 「ブオノ・ヴェーロ？」、美味しいだろうと言ったオジサンはイタリア人で、ここに住む孫のためにナポリの店を引き払いやって来たのだという。(どこにいたってフツウの生活)

これらの表現の時間的関係は「主節時→連体節時」の順になっている。ここでもし主節時視点をとるとしたら、連体節はル形になるはずである。しかし、いずれも連体節はタ形となっているため、これらの表現は「連体節がSTより前に成立している」ということを表す発話時視点をとっていると考えらえる。

この場合、主名詞が主題化され、主節は主名詞に対する説明を表している。また、これらの文の主節の部分は主名詞についての説明を表すため、以下のように装定(連体修飾)になっても両事態の前後関係は変わらない。

(35') [カシオのエクシリムで撮った]写真を紹介した。
(36') [女が持ち込んだ]麻薬に手を触れた。
(37') [ナポリの店を引き払いやって来た]オジサンは美味しいだろうと言った。

「C. 連体節＝主節→ST」

C1. 連体節の述語が状態性述語である場合

寺村（1991:201）は、「一般的な原則として、連体節の表す状態が、主節の表わす過去の時点での、つまり同時の、ことである場合は基本形をとり、主節（の過去）より以前のことを表わす場合は過去形をとる」と述べている。

例（38）で「ある」しか使えないのは、「大学が M 市にある」ことと「大学に通っている」ことが発話時以前の同時のことで、今もその大学が M 市にあるという可能性が残っているからである。タ形で「M 市にあった大学」と言うと、今は M 市にないような意味になる。これに対し、「M 市にある大学」と言うと昔から今まで恒常的に M 市に存在しているという意味になる。

（38） 清子は汽車で三時間ほどの M 市に{ある／?あった}大学に通っていた。（寺村 1991:201）

一方、例（39）や例（40）のように連体節の事態が過去のことで、発話時のことではないという場合は、連体節がタ形になる。

（39） 昔はあの崖の下にも墓場があってね、偶々そこにあった猫のお墓に頭をぶつけて死んだの。（女神）

（40） 近くにいた先生もなき声でびっくりしてたらしいよ。（Yahoo!ブログ）

C2. 主名詞が主節の動作の行われる時間を表す場合

この場合の主名詞は時間名詞で、「発話時視点」をとるのが一般的である。例（45）のように、連体節の「初めてこの店に行く」は主節の「雨が降る」という事態の起きている最中に起きた事態であるため、完全に同時であるとは言えないが、連体節の事態が生起した時点において主節の事態も生起しているため、「連体節＝主節」とした。例（46）も同様である。

（41） わたしがこの店に初めていった日は、雨が降っていた。（月刊アスキー）

（42） 前回、ロッテが優勝した年、初芝はなにをしてましたか？（Yahoo!知恵袋）

C3. 主節が形容詞句、名詞句、存在文である場合

この場合は例(43)のように、「認めてもらった」ことに対して「ラッキーだった」と評価したと捉えるなら、「連体節→主節」という時間的前後関係が認められるが、「娘がラッキーだ」ということが時間軸と並行して存在する属性と捉えるなら、「連体節＝主節」とも考えられる。例(44)も、「自殺した参事は〇〇さん前任者だった」ことを自殺した後に確認したことと捉えるなら、「連体節→主節」という時間的前後関係になるが、主節の「〇〇さんの前任者だった」を参事の属性として捉えるなら、「連体節＝主節」とも考えられる。例(45)も、「その船をおりた男の人が(岸辺に)いた」という意味で捉えるなら、「連体節→主節」という時間的前後関係になるが、「船をおりた」男の人が出現した／存在したという意味で捉えるなら、「連体節＝主節」とも考えられる。どの場合も「発話時視点」で連体節はタ形になる。

(43) 「多くの人に作品を認めてもらった娘はラッキーだった」と、受け止め方はあくまで冷静だ。(西日本新聞)

(44) 自殺した参事は、■■■さんの前任者だったことから、県警は、■■■さんの拉致事件との関連を含め調べている。(産経新聞)

(45) けれど、その船をおりた男の人が一人いた。(命を救え！愛と友情のドラマ)

5. 連体節の述語がル形の場合

コーパスからの用例を考察すると、連体節の述語がル形である場合、そのル形は主に例(46)のような一般的なことを表し、基準時(発話時か主節時)から見て現在か未来かのような時制性を表す例は少ない。

(46) 不動屋会社の表示する徒歩１分は八十メートルを表しています。(Yahoo!知恵袋)

5.1 視点の選択が問題とならない事態タイプ

D、E、Fの三つの事態タイプはいずれも連体節の事態が「発話時」や「主節」より後に起きる点で共通している。この場合、「発話時視点」であろうと「主節時視点」であろうと、連体節は主節や発話時の後に起きる事態であるためル形となる。

「D. ST→主節→連体節」

（47） 今月末から抗がん剤治療を受けるのですが、副作用で髪が抜けてしまうため、それを隠すカツラを買おうと思っています。（Yahoo!知恵袋）

（48） 油断していたら終わってしまった、ということもあり得ますので、見に行く映画館のHP をマメにチェックしてみてください。（Yahoo!知恵袋）

「E. 主節→ST→連体節」

（49） 報告終了後、辞任する副社長と庄司元昭専務が、大社義規会長に「申し訳ありませんでした」と何度も頭を下げた。（毎日新聞）

（50） 4 人は容疑を認め、「遊ぶお金が欲しかった」と話しているという。（朝日新聞）

「F. 主節＝ST→連体節」

（51） 江東区は区と区民が手を組んで公共の場所をきれいにする「区アダプトプログラム事業」に参加するボランティアを募集している。（朝日新聞）

（52） 来週二次会があるのですが、そのときに着ていく服装で悩んでいます。（Yahoo!知恵袋）

F は「主節＝発話時」で、連体節の事態はそれより後に起きることを表す場合である。例えば、例(51)の場合、主節の「募集する」ことが発話時において進行中の事態で、発話時と同時であると捉えられる[1]。主節時と発話時が同時であるため、どちらの視点をとるにせよ、「参加する」ことが基準時より後にあるため、ル形をとることになり、「主節時視点」と「発話時視点」の区別が不明確になると考えられる。

「G. ST→連体節＝主節」

この場合の「連体節＝主節」というのは、連体節の事態が起きる時点と主節の事態が起きる時点が完全に同時であるとは言えないが、広い範囲で同じ時間帯、または包含関係にある時間帯にあることを表す。

次の例(53)と例(54)は主名詞が時間名詞である場合の例である。例えば、例(53)について、連体節の事態「(その)時期に進路を決める」ことと、主節の事態「(その)の時期が来る」

[1] 「ている」は、主節の事態が発話時以前から始まっていることを表すが、本稿では同時であると捉え、「ている」の問題に関しては今後の課題とする。

ことが起きる時間が同じ「(その)時期」にあるため、「連体節＝主節」の分類に入れた。この場合、連体節と主節の事態の前後関係が意識されず、「発話時視点」をとるのが一般的である。例(54)も同様である。

(53) 進路を決める時期がそろそろ来るね。(Yahoo!知恵袋)
(54) ホール売りですので宅配か帰路につく日買ってください。(Yahoo!知恵袋)

また、次の例(55)と例(56)の主名詞はイベントを表す抽象名詞で、主節の述語とデ格／ニ格で結ばれる。この場合、例(55)のように主節の「会長選挙が行われる」ことの時間が連体節の「通常総会が開かれる」ことの時間に含まれ、広い範囲で「連体節＝主節」と考えられる。連体節の事態と主節の事態が明確な前後関係にならないため、「発話時視点」をとることになる。

(55) 翌二十九日に開かれる**通常総会**では会長選挙が行われるため、臨時総会の展開によっては、再選を狙うブラッター会長にとって、大きなハンデともなりそうだ。(読売新聞)
(56) 今年から道内で行うコンサドーレの**試合**に小中学生を無料で招待することを決めました。(北海道新聞)

「H. 連体節＝ST→主節」
(57) 成功談がある方、教えてください。(Yahoo!知恵袋)
(58) このまま自宅前にある民間車検場に車を持っていけば乗れるようになりますか？(Yahoo!知恵袋)

例(57)と例(58)の場合、連体節の述語が存在を表す状態性述語で、発話時において主名詞が存在している状態を表し、主節が発話時以後のことを表す。この場合は例(57)のように、「成功談がある」ことが恒常的な状態として、主節の事態が起きる時点においても存在すると捉えるなら、「連体節＝主節」とも考えられる。一方、まず発話時に「成功談がある」ということがあり、その上で「教える」ことがあると捉えるなら、「連体節→主節」という前後関係が認められる。どちらの場合にせよ連体節はル形になり、タ形にはならない。これは、タ形

になると、主名詞の「成功談」が発話時において存在するというのではなく、過去に存在したという意味になってしまうからである。例(62)も同様である。

5.2 視点の選択が問題となる事態タイプ

「A. ST→連体節→主節」

この場合の連体節の述語はル形で、連体節の事態が発話時より後にあることを表すため、「発話時視点」をとると考えられる。もし「主節時視点」で考えれば、連体節の事態が主節の事態より前にあるため、タ形になる。以下、事態 A を表す用例を考察し、「発話時視点」になる要因を見ていく。

例(59a)は発話時以前に約束をしていたということを表す文で、「週末」は「約束した」ではなく「出かける」に係るものとする。この場合、連体節の「(葉子が)週末にフィールドワークに出かける」ことは、葉子にとって、発話時においてすでに確定している予定であるが、主節の「大阪で会う」こととの前後関係は定まっていない。

そのため文脈によって、例(59b)のように「連体節:出かける→主節:会う」という前後関係にもなり、例(59c)のように「主節:会う→連体節:出かける」という前後関係にもなる。このような場合は「発話時視点」しかとれない。

(59) a. ［週末にフィールドワークに出かける］葉子と大阪で会うつもりだ。
b. ［週末にフィールドワークに出かける］葉子と出発後に大阪で会うつもりだ。
(ST→連体節→主節)
c. ［週末にフィールドワークに出かける］葉子と出発前に大阪で会うつもりだ。
(ST→主節→連体節)

一方、例(60a)と例(61a)は「発話時視点」で連体節がル形になる例で、例(60b)と例(61b)のように「主節時視点」でタ形にもなる。

(60) a. 治療後は、医師が指導する注意点だけはお守りください。(医師による切らない「赤アザ・赤ら顔(浮きでた青い血管))の最新治療)
b. 治療後は、医師が指導した注意点だけはお守りください。
(61) a. さらにもっと先なら、敬宮愛子さまが結婚されて、そこに生まれる男子を皇太子

の次の継承者にしてもいいわけです。(週刊現代)

b. さらにもっと先なら、敬宮愛子さまが結婚されて、そこに生まれた男子を皇太子の次の継承者にしてもいいわけです。

例(60)の場合、連体節と主節の時間的関係には着目せず、単に「注意点」の内容を述べるだけの場合は「発話時視点」でル形になり、「指導する→守る」という時間的前後関係が重要である場合は「主節時視点」でタ形になる。また、例(61)の場合、「そこに生まれる」ことが後ろの「継承者にする」と関係なく、発話時において、これから発生することとして捉えるなら「発話時視点」でル形になり、男子が生まれたらその男子を次の継承者にする」という時系列的な意味で捉えるなら「主節時視点」でタ形になる。

また、例(60)と例(61)のようにどちらの視点もとれる場合、「発話時視点」でル形になっても、「主節時視点」でタ形になっても、「ST→連体節→主節」という時間的前後関係になる。そのため、この場合は時間的前後関係で誤解を招かない。

「B. 主節→連体節→ST」

この場合、連体節がル形であるため、「主節時視点」をとると考えられる。もし「発話時視点」なら、連体節は発話時以前に起きる事態であるためタ形になるはずである。以下、この場合の特徴を分析する。

コーパスから収集した以下の例(62)と例(63)は、連体節の述語が全て移動動詞であり、その動作が進行中(完了していない)ことを表すためル形になっている。例えば、例(62)の場合、主節の「威嚇している」時点で、船に登って来る者を無数の貝で阻止しようとしているため、登って来ることまで完了していないと考えられる。このように、主節の事態が発生する時点で連体節の事態が「未完了」の状態にある場合、「主節時視点」をとりやすいと考えられる。これに関しては動詞の語彙的アスペクトとも関連していると考えられるため、今後はこの観点からさらに分析を進める必要がある。

(62) 船側には無数の貝が付着して、船に登って来る者を威嚇しているようだった。(五十メートルの戦記)

(63) 部屋に帰る入居者を見送ると、体をさすられ、手を強く握られた。(朝日新聞)

「C. 連体節＝主節→ST」

（64） 日本食が食べれる屋台も出るのでそれを目当てに行って来ました。（Yahoo!知恵袋）

（65） 本の内容について、韓国で悪意ある報道が行われたため、身の危険を感じた作者が一時的に閉鎖したとの事。（Yahoo!知恵袋）

C は「連体節＝主節」で、発話時より前に起きることを表す事態である。この場合、連体節の述語が例(64)のような可能形動詞や例(65)のような評価性のある状態性述語が多い。例(65)において、もし「報道が行われた」ことに対して、「報道は悪意がある」と評価したと捉えるなら、「主節→連体節」という時間的前後関係が認められ、「発話時視点」でル形の「悪意ある」をとることになる。しかし、普通はそのような解釈にはならず、「悪意ある」が「報告」の属性として捉られ、「連体節＝主節」という時間関係になっていると考えられる。

6. まとめ

以上、本研究では日本語の連体節について、述語の形（ル形・タ形）と「主節時視点」をとるか「発話時視点」をとるかという観点から分析し、次のことを明らかにした。

連体節、主節、発話時点(ST)の時間関係の違いから事態タイプを分析し、表 1 のようにタ形の場合は A～F の六つ、ル形の場合は A～H の八つに分類し、それぞれの特徴を明らかにした。

表 1. 連体節がタ形の場合とル形の場合が表せる事態タイプ

連体節がタ形	連体節がル形
「A. ST→連体節→主節」 「B. 主節→連体節→ST」 「C. 連体節＝主節→ST」	
「D. 連体節→ST→主節」 「E. 連体節→主節→ST」 「F. 連体節→主節＝ST」	「D. ST→主節→連体節」 「E. 主節→ST→連体節」 「F. 主節＝ST→連体節」 「G. ST→連体節＝主節」 「H. 連体節＝ST→主節」

このうち、事態タイプ A、B、C は「発話時視点」と「主節時視点」という二つの視点の視点の選択が問題となる事態タイプである。その視点の選択を決める要因を以下にまとめておく。

文全体が特定の時間を表さない非アクチュアルな事態を表す場合は、「連体節→主節」という時間的前後関係であるが、それが発話時点の前のことか後のことかは定まっておらず、超時的な事態を表す場合は、「主節時視点」になる。

「A. ST→連体節→主節」

「発話時視点」の場合:連体節の事態が発話時以後の確定した予定・計画を表し、主節の事態と直接的な関係がない(または主節の事態との前後関係が注目されない)。

「主節時視点」の場合:連体節の事態がいつ発生するか、または発生するかどうかが不確定で、もし発生した場合、主節の事態も発生することを表す。

「B. 主節→連体節→ST」

「発話時視点」の場合: 主題を表す助詞「は」を主名詞につけることで、主名詞が主題化され、主節が主名詞の説明になる。

「主節時視点」の場合: ある過去の時点において、連体節の事態が「これから発生する」ことを表す。また、主節の事態が「これから発生する」連体節の事態に対する動き・反応を表すことが多い。

「C. 連体節＝主節→ST」

「発話時視点」の場合: 連体節の述語はモノ・人などがある場所に存在することを表す「ある」、「いる」である。

「主節時視点」の場合: 連体節の述語は評価性のある状態性動詞である。

今後は動詞の語彙的アスペクトの違いを念頭におきながら、連体節のル形とタ形の比較を進めるとともに、「太った人」や「成功する可能性」のような非時制のル形とタ形についても分析していきたい。

付記　本稿は 2022 年度に名古屋大学に提出した筆者の修士論文『日本語の連体修飾節におけるル形、タ形について』(2023 年 3 月学位取得)の一部に加筆修正したものである。

参考文献

伊藤創（2011）「連体修飾節におけるル形、タ形についての一考察」『国際研究論叢』第 24 巻：193-208.

岩崎卓（1998a）「連体修飾節のテンスについて」『日本語科学』第 3 巻：47-66.

岩崎卓（1998b）「従属節のテンス認定の問題―外の関係の連体修飾の場合―」『日本学報』第 17 巻：27-42.

大島資生（2008）「連体修飾節と主節の時間的関係について」『日本語文法』第 8 巻第 1 号：101－117.

寺村秀夫（1984）「従属節のテンス・アスペクト」『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.

丹羽哲也（1997）「連体節のテンスについて」『大阪市立大学文学部紀要』第 49 巻第 5 号：295-330.

丹羽哲也（2013）「連体修飾節における基本形とタ形の対立」『形式語研究論集』:263－283.

町田健（1989）「従属節中の時制」『日本語の時制とアスペクト』：101－146.

三原健一（1991）「「視点の原理」と従属節時制」『日本語学』第 10 巻第 3 号：64-77.

三原健一（1992）『時制解釈と統語現象』くろしお出版.